



切っても切ってもキンタロー

～母と息子の学校体験～

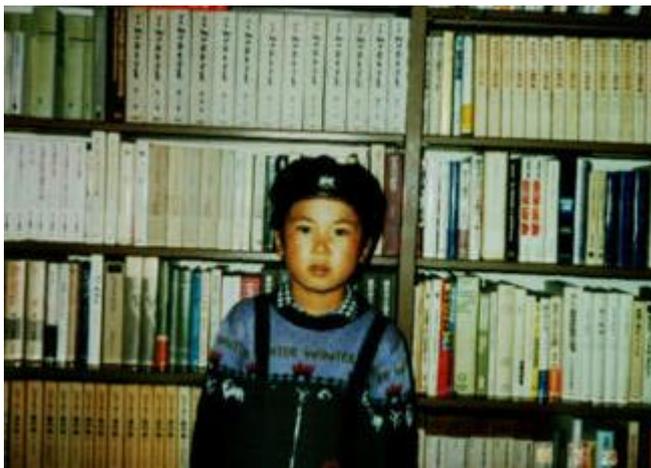
(メディカ出版「あも」1号, 1989, pp.102-103)

これは妻が1989年発刊の「あも」というカストリ雑誌への投稿文です。

この中に出てくる息子は今は高校3年生、携帯ガスコンロを学校の教室に持ち込み、昼食に雑炊を作って友だちと食べるといった能天気なやつですが、中学校時代に不登校を経験しています。(1997年父記す)

でもその能天気なやつも何とか高校を卒業し、大学へ入りました(1998年)。経済学部
に席を置いていますが、理論より実践が好きなのか、実習ばかりやっています。つまりアルバイトです。しっかり稼いでいるようで、私より小遣いは多いし、私が持てないマイカーまでも
っております。イタリア大衆料理店やコンビニで毎晩働いておりますので、大学の方は昼間定
時制のようなものですな。私としては授業料も自分の稼ぎで払ってくれたら言うことはないの
ですが...

今思うと当時の妻の予言が見事に的中したと思えることもあったのですが、それ以上に子ども
というのはたくましく成長していくものなのだと改めて実感いたします。(2000年父記す)



この写真は小学校入学直前の春休み、早く学校に行きたくて行きたくてたまらず、制帽をかぶりそ
の気になっているところです。しかしその楽しみにしていた学校は、さてどんなところだったので
しょう。

ある日、お土産にもらった金太郎飴に感心して見入っていた息子が、突然「ネエ、お母さん。これさあ、学校みたいだね。だって、学校って、切っても切ってもキンタローなんだよ」と、深い溜息とともに言った。やつぎばやに「何でそう思うの」と、尋ねてみたが、答えられるはずもない。小学校1年生の1学期のことであった。

入学式の2日後には、校舎の屋上までも探検し、併設の幼稚園・中学校の方まで遠征し、自分流の「面白いもの」は、もうみな見てしまったのに違いない。となると、後はもう学校というところは「切っても切ってもキンタロー」なのである。

この言葉を聞いたとき、はじめはこちらの方が「なんと鋭い観察力！」などと感心してしまったのであるが、よくよく考えてみると、感心ばかりもしてられないはずである。

そうこうするうちに、1学期もなんとか終わり、夏休みが始まった。宿題もほとんど出さず、いままでさんざん遊びほうけていた「だらしない学校生活」から、少しは「けじめのある家庭生活」をおくらせるべくしつけようと、てぐすね引いて待っていたところである。朝は5時に起きて、5時半(!)には子ども会のラジオ体操、帰れば朝食、食事の後片付けにピアノのレッスン、勉強がすむ頃にはようやく8時(つまり3時間の間にこれだけ詰め込む)という日課であった。(この箇所の時間はすべて1時間まちがっていると思うのですが、絶対そうだと母は譲らず-父の注釈)

これを3人の子どもたちに順繰りにやっていかねばならないのであるから、「少々のごときは、みんなで我慢しなさい」と勝手に押しつけた。「夜は日記を書くだけでいいからね」とかなんとか、うまく言いくるめて、とにかく1日目はこちらのペースでうまく運んだつもりでいた。しかし、2日目にして、ついに息子が「学校って、いいところだなあ」と言う。「あれっ、キンタロー飴じゃなかったの」と、こちらもすかさず言ってみた。ところがなんと、金太郎飴の時以上に愕然とする答が返ってきた。「だって...。学校って、ほっといてくれるもの」。このことばには妙に説得力があった。夏休み2日目にして「けじめある家庭生活」は、もろくも崩れ去ったのである。

この息子は、現在、中3と小3の姉妹にはさまれて小学校4年生を彼なりに生きている。とにかく、外づらのよい2人の姉妹と比べられ、時にはひどいチックに耐えながらも、不思議なことに学校だけは行きたがるのである。この子にとって学校とは一体何なのであろうか。

大学の教育学部の付属学校であるため、研究授業や教育実習など、他の学校に比べれば刺激が多いかも知れない。しかしそれだけに個人的な制約も多いのではないかと思うのであるが、本人はいっこうにかまわならしく、毎年ひとりふたりはお気に入りのお姉さん先生をつくって、手紙を書いたり電話をかけたりしている。

さて、2人の娘たちはと言うと、前にも言ったとおり、外づらがよく、学校では模範生を演じて(しかも熱演して)くるので、家では、その反動が出て実にすさまじい。担任の先生は、必ず「学校では、よく手伝いもしてくれて、お友だちのことも気づかったり、本当に言うことありません」とおっしゃる。親の見栄もあるので、多少割り引いて家の様子を話すと、いちように「本当ですか？」とびっくりされる。先日も、下の娘は学校でのストレスからひどいジンマシンを出し、学校を休んだ。2人の娘は、どちらも「学校へ行きたくない」状況を経験している。

息子は学校を「キンタロー飴」と決めて、それなりに自分の生き方に取り込んだり切り捨てたりし、何と云われても嫌なものは嫌で押し通す。ところが、一見よい子の娘たちは、学校によって、自分たちが「キンタロー飴」にされてきてしまっているのではないだろうか。

たしかに、出る杭は打たれ、学校での生活の中で生じる義憤やさまざまな行き違いは、毎日少しずつ平らにならされていくのに違いない。学校での出来事をひとつひとつ、時には涙ながらに訴えることもあったが、それらはみな、いつの間にかすり合わされ互いに同じ面が同じ形に整えられていく。はじめは我慢のならなかったことでも、そのうち心に波風が立たなくなってくるのである。それは学校というひとつの社会的集団の中における個人の成長であると捉えることができるかもしれない。そしてそれこそ教育という名の下に敷設される軌道なのであろう。学校ではその側面だけが強調され、その軌道を逸する子どもは引き戻され、馴らされていく。はたしてこれが本当に自由な精神の成長であるといえるのであろうか。そして子どもたちが馴らされていく過程で少しずつその精神の自由を奪い取られていくとしたら、そこには何とも恐ろしい学校の構図が見えてくるのではないか。これこそ息子の言う「切っても切ってもキンタロー」なのだと思う。

学校での成績についても面白いことがあった。2人の娘は息子よりはよい評価を取ってくるが、息子はそもそも評価の対象を外れているのではないかと思われる。1年生の時には本人は成績表の存在にすらまったく気づいていないのではないかと思われたが、2年生になってからは、どうやら「成績のよい人もいるし、悪い人もいる」ということに気づいたらしい。そして彼なりのやり方で納得のいくまで担任の教師に説明を求めたのである。その結果こう言った。「お母さん、ぼくの成績表が悪いってことでぼくを怒らないで。だって、いつもお母さんは言うじゃないか。みんなと同じでなくていいって。ぼくには、だれとも比べられないぼくだけが持っているものがあるって」と。成績というものは、「みんなと比べる」ということが前提になっていることに気づき、相対評価の尺度をもって自分を測るなという意味のことを言っていたのである。たしかに、みんなを等しく測ることのできる尺度などあるわけがない。子どもに言われるまでもないのだ。

これほどまでに自分の存在を確かなものにして息子は、しかし、この先、日本の学校教育にうまくはまっていくことはできないであろう。この先息子を待ち受けている社会

では、学校の教育を受けたということが、ひとつのライセンスとなり基盤ともなっていることを思うと、母親としては少し弱気にもなってくる。しかし教育実習生の授業中に「おまえはぼくを無視しているな」と教生に向かって堂々と抗議し（実際、その教生は、自分の作った指導案通りに授業を展開するべく、筋書き通りにいかない発言をする男の子数名を無視して、発言させなかったと、後で担任教師から報告があった）、ひとと比べられることを嫌い、自由な発想のもとに飛び回る息子は、言ってみれば、学校が作り出してしまった「学校に合わない子ども」なのだ。息子のように学校を自分に合わせていくことのできる子どもも、自分を学校に合わせていくことを嫌い、学校に行くことに疲弊し、学校そのものを拒絶するに至る子どもも、つきつめれば何ら変わりがないのではないか。

その息子も、最近学校の中で違った顔のキンタロー（それともモモタロー？）に出会ったらしい。4年生から6年生までの有志で構成されている合唱団に入団したのだ。「ぼくは、メゾソプラノを歌っているの」と言うので、ちょっと聞かせてもらったが、何のことはない。ソプラノのメロディをちょっと低くして歌っているのだ。これでは、あまりにも申し訳ないので、指導して下さる先生にそう話すと、「欠かさず練習に出てくれるだけでうれしいですよ」とのこと。これには本当に頭が下がる思いだった。そして今、息子は気に入ったひとつの歌のフレーズに出会い、とても大事にそこを歌ってくれる。神沢利子作詞・小林亜星作曲の「あたまの上に空」という歌の「あたまは空の一点を指す」というところだ。ここを歌うちょっと前になると、胸がわくわくするのだという。そしてこのフレーズは本物なのだそうだ。自分が大地にしっかり立って、空の下にいと、本当に一点を指しているような気がするのだという。

かつてイリッチの「Deschooling Society」（日本語版は「脱学校の社会」）の「Deschooling」を「学校を脱ぐ」と訳された教育学の先生がおられた。何と自由に、まるでマントか何かのように、いつでも脱いだり着たりすることのできる発想に、20年前の私は素直に驚いた。そしてまた、その先生は、「見えないものを信じて、見えてくるまで見続けるところに真実が存在する」とも言われた。子どもの生命の見えない部分を見つめることが教育であるならば、学校は、それが見えてくるまで見続けるべきではないか。

いま私は、9歳の息子の目を通して、子どもの宇宙を見、無限に広がる可能性を共にするとき、「着脱可能な学校」という発想がいかに大切かを思い知らされるのである。